

(3) 打倒ウエルタ

ベヌスティアーノ・カランサ

保守派がウエルタのもとに団結したのに対し、もとの革命戦士たちは分裂し、意気消沈していた。マデロとピノ・スワレスが殺された後、全国的に名の知れた軍事指導者はエミリアノ・サパタ、パスクアル・オロスコそしてパンチョ・ビヤの三人のみであった。サパタは「南のアティラ」と呼ばれ、十九世紀ユカタン半島のマヤ・インディアンが起したカースト戦争のようにインディアンでなかったら皆殺しにされる、と中産階級の人々から恐れられていたので、全国的に幅広い支持を得るのは困難であった。マデロに対して戦いを挑んでいたオロスコは、直ぐにウエルタと和平を結び、一軍を率いて軍事独裁者の元に走った。ビヤは亡命の身であり、マデロ政府に逮捕され、盗賊として告発され、すっかり威信を失っていたばかりか、彼の兵士たちは解散させられ、連邦軍に徴兵され、あちこちに四散していた。¹

マデロの下で全国的にその名を知られた政治家で、マデロの精神を受け継ぐ人と目されていたのはアブラム・ゴンザレスであった。ウエルタはゴンザレスが連邦政府に反旗を翻すことを恐れて、ゴンザレス逮捕を命じた。ゴンザレスはマデロが連邦軍を信じたような愚直ではなかったが、チワワ州知事を逮捕するようなことはしないと約束した誠実で礼儀正しい連邦軍ジェネラル・アントニオ・ラバゴを信用するあまり、自分は安全だと思い込んでしまっていた。逮捕は免れないと警告した彼の友人たちを無視したゴンザレスはチワワ市に留まった。やがて逮捕されたゴンザレスはメキシコ市へ送られた。途中、護送隊長が列車を止め、ゴンザレスを引きずり出して射殺した上、死体を線路の上に置き、自分が乗っている列車で轢いた。公には、ゴンザレスが脱走を企てたことにした。²

大都市にはストやデモもなく、クーデターに対する目に見える反対運動もなかったことで、軍事支配者は自らを正当化出来たと考えた。しかし僅か三週間後、ヘンリー・レーン・ウイルソンも軍事政府も、国内を安定化させ、新たに大規模な革命の発生を防げると考えたのは見込み違いであったことを知った。新しい革命の動きは、1910-11年のマデロ革命が起こった同じ地域で始まった。同じ指導者が登場するが、今度は前回の再現ではなく、更に過激で、凄惨で、計画的であった。フアレス和平条約のような妥協は二度としてはならないことを両者は共に気付いていた。小規模のゲリラ戦が多かったマデロ革命は、より大きい正規軍が衝突し、大量の犠牲者を出す戦闘に変わった。先の革命では都市は戦火を免れたが、今度は残酷な戦いで、多くの市民が犠牲になった。経済が崩壊し飢餓と飢饉が各地で発生した。³

今度の革命も前と同じ場所、五つの州、モレロス、コアウイラ、ソノラ、チワワ、ドゥランゴで発生した。マデロ政府高官で、ウエルタを認めない宣言をしたのはコアウイラ州

知事ベヌスティアノ・カランサであった。彼は生い立ちも政治歴も、他の革命指導者とは全く異なっていた。マデロ革命で特に功績があったわけではなかったが、マデロはカランサを知事に任命し、以来二年間カランサはマデロの政策に従った。⁴

カランサは頑強な意志とイデオロギーで激しい動乱を乗り越え、1916年から暗殺される1920年までの間、革命を制して政権の座にあった。メキシコや北米の歴史家は革命の意義を探ろうとして、革命が最も混沌としていたときに活躍したマデロ、サパタ、ピヤに焦点を当て、勝者であるカランサの研究はなおざりにされてきた。

カランサの父親ヘスス・カランサ・ネイラはインディアンと戦った辺境開拓者で、改革戦争ではリベラル側に付いた。農場主でラバ追いであったドン・ヘスはフランス介入戦争の折、ベニート・フアレスとコアウイラのジェネラルとの間の連絡役を買って出、亡命中のフアレスの家族へ金銭的な援助をした。国が落ち着いた頃、政府から土地の譲渡を受けて財を成した。ベニート・フアレスの歴史を学んだ息子たちの中で特に傾倒したのが十一番目、1859年12月29日生まれのベヌスティアノであった。ベヌスティアノはリベラルな学校として有名なサルティヨのフエンテ・アセネウムで学んだあと、1874年、十五歳のときメキシコ市のナショナル・ハイスクールに入学した。在学中、ポルフィリオ・ディアスによるトゥステペックの叛乱で、フアレスの後継者レルド・デ・テハダが倒され、ディアスが首都に凱旋した。コアウイラに戻ったベヌスティアノは結婚して二人の娘を儲け、1887年、二十七歳のときクアトロ・シエネガ地区の議長となって政治の世界に入った。⁵

1893年、ディアスがコアウイラ州知事ホセ・マリア・ガルサ・ガランを留任させようとしたことに、武装した三百人の農場主が反抗した。これにカランサ一族が深く関わっていた。ディアスは直ちに北東地区司令官ベルナルド・レイェスを介入させ、調停に当たさせた。レイェスの計らいでディアスに謁見を許されたカランサは、動機を説明し、行動の正当性を述べた。ディアスは要求を受け入れたが、このことが後々まで二人の間にしこりを残すことになった。ベヌスティアノは1894年から地方政治に携わり、1904年、レイェスの信奉者であるミゲル・カルデナス知事の推薦で国会議員となった。フランシスコ・マデロほど極端ではなかったが、民主主義の熱烈な信奉者であったベヌスティアノは、ディアスの後継者と目されたベルナルド・レイェスに傾倒していたが、レイェスがヨーロッパへ追い出されてからマデロ支持者になった。1909年、ディアスの許しを得て知事選挙に立候補したベヌスティアノは、すでに臨時州知事を経験していた上、マデロ一族をはじめ幅広い支持を得ていたにもかかわらず、独裁者に反対され落選した。大統領の仕打ちに憤ったカランサは、サン・ルイス・ポトシで囚われているマデロを訪ねた。しかし、カランサは初期のマデロ革命には消極的であったため、1911年1月、マデロに呼び出されたカランサはサンアントニオへ向かった。サンアントニオでマデロに会ったことは、ディアスのスパイによって逐一報告されていたことを知ったカランサは表立った行動には出

なかった。6

カランサは5月3日、フアレス市で行われたマデロとディアスの和平会議に国防相長官として参加した。ディアス政府代表者との交渉中に彼は預言者のような発言をした。学生時代、トゥステペック革命を目の当たりにし、メキシコの歴史を具に学んだカランサは会議に臨んだ誰よりもメキシコにおける革命の性格を熟知していた。「メキシコの民を代表している我々は、ディアスとコラルの辞任を受け入れるわけにはいかない。何故ならば、そうすることにより彼らの政権の合法性を認めることになるからである。革命で譲歩する事は、その革命は失敗であったことを意味する。わが祖国が求めている社会改革は決定的な勝利によってのみ成就できる。革命を、真の革命を勝ち取るためには容赦は許されない。ディアスとコラルの辞任によって得られるものは何か。彼らの友は権力を握ったまま、我々が今日戦っている腐敗した組織はそのまま残る。残忍な独裁政治を引きずった暫定政府は弱く効果がない。健やかな革命の要素は、それらの腐った手足によって汚染される。病的な人道主義のために国家が悲嘆に暮れ、嘆き悲しむ日が来る。これまで懸命の努力と数々の犠牲により勝ち得た果実は腐ってしまうであろう。もう一度云う。革命で妥協をすることは、自殺行為である」マデロと彼の側近は聴く耳を持たなかった。結末はカランサの予想通りとなった。7

6月3日、カランサはピエドラス・ネグラスでマデロと会談し、暫定州知事を引き受け、8月に行われた知事選挙で無事当選を果たした。一年半に及ぶ在任中の政策で最も成功したのは教育改革で、教育費三十七万五千ペソを投入して九つのハイスクールを創設したほか、教育振興に尽力した。鉱山の事故防止など労働条件の改善にも努力したが、成果は上がらなかった。このときの経験で外国企業を取り締まる法律が欠如していることを痛感した。8

1913年2月18日、カランサはウエルタからメッセージを受け取った。大統領と閣僚が逮捕されたことにより、議会から承認を得て、自分が大統領権限を掌握した、と言うものであった。カランサは直ちにコアウイラ州議会を召集し、ウエルタを承認しない決議案を採択した。しかしカランサは直ぐに自分が孤立していることを知った。チワワのゴンザレス知事は殺害され、サン・ルイス・ポトシのセペダ知事は逮捕され、アグアスカリエンテスのアルベルト・フエンテスは更迭され、ソノラのホセ・マリア・マイトレナ知事は反ウエルタで結束している州兵を統括するのを避けて、健康上の理由として休職願いを出し、アリゾナ州チューサンに居を構えた。ソノラはマイトレナが不在となってもウエルタ支持にはならず、議会は暫定政府を任命して、反ウエルタ闘争を決議した。9

カランサはパブロ・ゴンザレスと弟ヘスス・カランサが率いる州兵部隊を招集し、州の銀行から七万五千ペソを強制徴用し、3月3日、ウエルタとの対決を鮮明にした。カランサは改革を約束して支持層を広げようとはせず、ゲリラ戦法をとろうとしなかった。カラ

ンサ軍はアネロ、サルティヨ、モンクローバで優勢なウエルタ軍に三度にわたり敗れ、カランサは革命勢力が支配するソノラ州に避難した。¹⁰

1. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P195
2. Ibid. P196
3. Ibid. P197
4. Ibid. P198
5. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, a History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P335
6. Douglas W. Richmond, "Venustiano Carranza's National Struggle, 1893-1920", University of Nebraska Press, 1983, P22
7. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, a History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P33 7
8. Ibid. P338
9. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P200
10. Ibid. P202